

| | |
|------------------|---|
| Title | 高齢者にとってのテレビ：記憶の中のテレビと現在のテレビ視聴 |
| Sub Title | |
| Author | 大坪, 寛子(Otsubo, Hiroko) 国広, 陽子(Kunihiro, Yoko) |
| Publisher | 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所 |
| Publication year | 2012 |
| Jtitle | メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.62 (2012. 3) ,p.107- 119 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20120300-0107 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高齢者にとってのテレビ

——記憶の中のテレビと現在のテレビ視聴——

大坪寛子・国広陽子



▶ 1 問題の設定

2011年7月24日、テレビのアナログ放送は、東日本大震災で甚大な被害を受けた東北3県を除き、終了した。これは、1953年にテレビ本放送が開始されてから58年目に迎えた大きな節目である。この機会に、これまでテレビは人々にどのような意味をもたらしてきたのか、人々にとってテレビとは何であったのかを振り返ってみたい。もちろん、テレビという存在が持つ意味は人それぞれに異なるだろうが、この最大58年にわたるテレビとの共生の歴史を、どのライフステージで迎えたか、また日本の戦後史の中のどこで迎えたかということに大きく規定されるだろう。そこで本稿では、現在のオーディエンスのある年齢コーホートに焦点を当てて検討することにした。具体的には、「後期高齢者」と呼ばれる75歳以上の年代の人々に注目し、インタビュー調査やウェブでの質問紙調査の結果に基づいて、これまでに行われた数々の調査結果も参考にしながら、このコーホートに該当する人々にとってテレビがどのような存在であったのかについて考察する。

いわゆる後期高齢者に該当する75歳以上とは、2011年12月31日現在の満年齢で区分するならば1936年（昭和11年）以前に誕生した人々となる。本稿では、その10年ほど上の生年1925年頃までのコーホートを対象に検討しているが、このコーホートは、河野（2008）の世代区分によると、ちょうど「戦争世代」と「第一戦後世代」との境に該当する。河野は、1973年から2008年までの35年間に5年ごとに行われてきたNHK「日本人の意識調査」のデータに基づき、回答者の生年を5年きざみにした各生年コーホートの類似性の高い群をまとめ、現代の日本人を6つの世代、すなわち「戦争世代」（生年が1928年以前）、「第一戦後世代」（1929年から1943年）、「団塊世代」（1944年から1953年）、「新人類世代」（1954年から1968年）、「団塊ジュニア世代」（1969年から1983年）、「新人類ジュニア世代」（1984年以降）に区分した。河野（2008）によると、「戦争世代」と「第一戦後世代」は政治意識や価値意識については異なっているものの、性役割や家族についての意識は共通しており、家庭内での性別役割分担を肯定する割合や、結婚後の妻の姓は当然に夫の姓を名乗ることを支持する割合がともに高く、下の世代とは異なる傾向を示している。

本稿では、モデルとして1930年（昭和5年）生まれを想定し、その前後5年の年齢コーホート（生年1925年～1935年／大正14年～昭和10年）の男女を中心に検討した。モデルを想定したのは、戦後史上またはメディア史上重要な出来事を迎えた年齢を算出して、ライフステージのどの段階で迎えたのかを捉えやすくするためである。モデルは、1945年（昭和20年）の終戦を15歳の時に迎え、テレビ本放送が開始された1953年（昭和28年）には23歳、この時期最大のメディア・イベントである皇太子の結婚パレードがあった1959年（昭和34年）には29歳、1964年（昭和39年）の東京オリンピックの時は34歳であった。であるから、このコーホートは、すでに成人し社会人として歩み始めた初期の段階、すな

わち職業生活や家庭生活のスタートを切って間もない時期にテレビと出会い、その後の人生をともに過ごした人々である。物心ついた頃にはすでにテレビがあったいわゆる「テレビっ子」¹⁾の親の世代に該当する。また、1960年(昭和35年)に池田内閣が「所得倍增計画」を発表した年には30歳、1968年(昭和43年)にGNPが自由世界第2位となったときには38歳、1973年(昭和48年)の第1次オイルショックを43歳の時に迎え、ここで高度経済成長期の終わりを経験したものの、その後も日本経済は一時的な後退や停滞をしながらも安定成長を続け、バブル景気の始まりとされる「プラザ合意」のあった1985年(昭和60年)には55歳、バブルがはじけて「地価下落」や「カード破産」が話題となった1992年(平成4年)には62歳であったから、このコーホートは、職業人としての現役生活を右肩上がりの日本の経済成長とともに歩んできたと言うことができる。その後、1995年(平成7年)の阪神大震災や地下鉄サリン事件を65歳、2001年(平成13年)のアメリカ同時多発テロ事件を71歳、2011年(平成23年)の東日本大震災を81歳で迎えており、人生の後期に入って再び日本社会および世界全体の安全性や安定性を脅かすような大事件や大災害に遭遇している。

▶ 2 研究の方法

本研究では、これまでに筆者らが行ってきた数々の調査で得たデータを用いた。まず、テレビ視聴に関して2008年に実施した団塊世代から上の世代への一連のインタビュー調査のうち、該当する年齢の男女3名ずつの個人インタビュー調査結果を用いた²⁾。次に、山口県大島郡周防大島町の高齢の男性12名を対象に、コミュニケーションの創出および活性化のための過去のテレビ番組活用の可能性を探ることを目的として2009年に実施したグループ・インタビュー調査³⁾のうち、該当する年齢の参加者3名の発言を利用した。さらに同じく山口県周防大島町の高齢女性12名を対象として、高齢者のQOLを高めるために過去のテレビ番組の活用の可能性を探索した研究を2010年に行ったが⁴⁾、その中から該当する年齢の参加者11名の発言を用いた。また、これらインタビュー調査の過程で、補完的にその子ども世代への聞き取りも行っており、こうしたものも含めて検討している。これらの調査参加者の年齢や居住地など詳細については表に示したとおりである。さらに、筆者らもメンバーとして参加した萩原らのウェブ・モニター調査(萩原他、2010)のデータも、70歳以上の回答者28名分(男女各14名)のみを再分析して利用した。これらのデータの分析結果に基づき、公表されている数々の調査結果も参照しながら考察を行った。

▶ 3 結果(1)：高齢者の記憶の中のテレビ

記憶に残るこれまでのテレビとのかかわりを、テレビとの出会いの時期と、それ以降、職業人としての現役時代を終える60歳ごろまでの時期(中年期)とに分けて報告する。なお、かっこ内に付した調査参加者の年齢は、参加者が最も多かったインタビュー実施年の2010年の12月31日現在の満年齢としている。

脚注

1. 1960年代初頭に流行語となったもので、1日3時間以上テレビを見る「テレビ・チャイルド」の波多野完治による翻訳だとされる(佐藤2008:101)。
2. 詳細は国広・大坪(2009)。本研究に当たっては、武蔵大学武蔵メディアと社会研究会から助成を受けた。
3. 詳細は国広(2009)、国広・大坪(2010)。本研究に当たっては、放送文化基金平成20年度助成・援助(人文社会・文化)を受けた。
4. 詳細は大坪・国広・有馬(2011)、大坪・国広(2011)。本研究に当たっては、放送文化基金平成21年度助成・援助(人文社会・文化)を受けた。

●表 本調査参加者の基本属性と実施調査基本情報

| 調査参加者 | 性別 | 生年 | 年齢 | 居住地 | 調査方法 | 調査実施時 |
|-------|----|-------------|-----|-------------|-------------|-------------|
| KKさん | 男性 | 1926年／大正15年 | 84歳 | 山口県大島郡周防大島町 | 個人インタビュー | 2008年9月 |
| KEさん | 男性 | 1926年／大正15年 | 84歳 | 山口県大島郡周防大島町 | 個人インタビュー | 2008年12月 |
| TNさん | 男性 | 1926年／大正15年 | 84歳 | 福岡県福岡市 | 個人インタビュー | 2008年8月 |
| TKさん* | 女性 | 1917年／大正6年 | 93歳 | 神奈川県横浜市 | 個人インタビュー | 2008年9月 |
| HMさん | 女性 | 1934年／昭和9年 | 76歳 | 山口県大島郡周防大島町 | 個人インタビュー | 2008年12月 |
| SNさん | 女性 | 1934年／昭和9年 | 76歳 | 福岡県福岡市 | 個人インタビュー | 2008年8月 |
| IKさん | 男性 | 1934年／昭和9年 | 76歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2009年6月～8月 |
| KUさん | 男性 | 1927年／昭和2年 | 83歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2009年6月～8月 |
| TAさん | 男性 | 1927年／昭和2年 | 83歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2009年6月～8月 |
| THさん | 女性 | 1933年／昭和8年 | 77歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| HUさん | 女性 | 1929年／昭和4年 | 81歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| KMさん | 女性 | 1930年／昭和5年 | 80歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| RYさん | 女性 | 1936年／昭和11年 | 74歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| MAさん | 女性 | 1932年／昭和7年 | 78歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| ASさん* | 女性 | 1939年／昭和14年 | 71歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| HKさん | 女性 | 1933年／昭和8年 | 77歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| YMさん | 女性 | 1927年／昭和2年 | 83歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| KHさん | 女性 | 1924年／大正13年 | 86歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| NKさん | 女性 | 1928年／昭和3年 | 82歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| HFさん | 女性 | 1925年／大正14年 | 85歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |
| AFさん | 女性 | 1925年／大正14年 | 85歳 | 山口県大島郡周防大島町 | グループ・インタビュー | 2010年5月～10月 |

*のついた調査参加者は当該年齢コーホート外のため参考扱い
年齢は2010年12月31日現在の満年齢



3.1 テレビとの出会いと受像機購入の記憶

1953年（昭和28年）、2月にNHK東京テレビ、8月に日本テレビが開局し、一般視聴者向けにテレビ放送が開まったが、広告メディアとしての威力を発揮させるために視聴者数を増やそうと考えた日本テレビは、街頭テレビを、東京では新橋駅西口広場や浅草観音の境内などに設置した。街頭テレビの設置場所は最終的には全国278箇所に及び、多数の観客を集めた（NHK放送文化研究所編、2003）。

福岡市に在住していたTNさん（84歳、男性）は、市内一の繁華街である天神の商店街「新天町」に街頭テレビがあったことを記憶しており、そこでプロレス中継を見たと言う。山口県大島郡周防大島町に暮らしていたKEさん（84歳、男性）の場合は、その地区の公民館に地区で購入したテレビが設置してあり、1円か5円かの料金を払って視聴していたという話であった。その後、地区内のお寺さんが買い、続いて裕福だった歯科医師の家が買ったとのことである。同じ周防大島町の別の地区では、その地区の電器店が5円か10円ほどの料金を取ってテレビを見せていたということであった。香川県小豆島でSNさん（76歳、女性）が暮らしていた地区にも公民館にテレビがあったと言う。そのテレビは、「夜逃げのようにして」ハワイに渡った人が成功して帰国した際に地区に寄贈したもので、最初は地区の子どもたちだけに見せていたが、大人たちも見たいとの希望があったため、後に大人にも見せるようになったということであった。

本調査参加者たちはこのように、街頭や近所の電器店、あるいは公民館など、自宅以外の場所でテレビと出会い、接触していた。しかし、やがてテレビの普及に伴って、自宅にテレビ受像機を購入するようになる。購入が「周囲に比べて割に早かった方」と言ったTNさんは、1957年（昭和32年）に第一子が生まれた後に月賦でテレビを購入し、そしてその次の年にはボーナスで電気冷蔵庫を購入、最後に電気洗濯機を買って、いわゆる「三種の神器」を揃えたと言う。1959年（昭和34年）、当時33歳だったTNさんは、皇太子の結婚パレードは自宅のテレビで見たということだった。

この1959年の皇太子結婚パレードは、当時最大のメディア・イベントであり、大規模なテレビ中継が行われた。このパレードを見たことがテレビの急速な普及につながったと言われているが（NHK放送文化研究所編，2003），本調査でも、この年にテレビ受像機を購入したという参加者がいた。まず、当時25歳だったIKさん（76歳，男性）は、山口県周防大島町に暮らしていた父親に結婚パレードを見せてあげたいと、仲間の定期預金を担保に借金して購入したと言う。それから毎月返済することになったが、「とにかく高かった」とIKさんはしみじみ語った。同じ周防大島町に住み、当時34歳だったAFさん（85歳，女性）の家でも、この年に外国航路の船員だったAFさんの夫が購入したことを、AFさんの娘は記憶していた。

やはり周防大島町に暮らし、夫が外国航路の船員であったHMさん（76歳，女性）は、結婚パレードの中継は実家の隣の家で見せてもらい、テレビ受像機購入は1961年（昭和36年）春ごろ、HMさんが27歳の頃だったとの記憶がある。しかしHMさん以外に、結婚パレードは自宅以外で視聴した記憶がありながら、自宅にテレビ受像機を購入した時の記憶が鮮明だった人は、本調査の中にはいなかった。テレビ普及期の代表的メディア・イベントとして、この1959年の皇太子の結婚パレードに続き1964年（昭和39年）の東京オリンピックがあるが、本調査参加者の多くは、この両メディア・イベントをどこで見たかの記憶を手掛かりに、テレビ受像機購入の時期を想起しようとしていた。当時、東京で暮らしていて実際に沿道でパレードを見たというRYさん（74歳，女性）のような人もいたが、結婚パレードはすでにテレビを購入していた近所の「お金持ちのお宅」や知り合いの家など自宅以外のテレビで見て、東京オリンピックは自宅で見たと記憶があるから、この間のどこかの時期にテレビを購入したのだろうと語っていた。

購入の記憶がある中では最も遅かったHMさんが購入した1961年に、白黒テレビの都市部の全世帯普及率は62.5%となったが⁶⁾、地域差は大きかった。山口県の周防大島町は、島嶼部であった分、普及は比較的遅く、『周防大島町誌』（1994）によると、1958年（昭和33年）、東京では3戸に1台という割合で普及が進んでいたが、山口県全体では30戸に1台、周防大島町では90戸の1台の割合だった。TNさんの娘の記憶でも、福岡市の社宅に近所の人が見に来るようなことはなかったが、1962年（昭和37年）にTNさんの転勤で長崎市に転居すると、近所の大人や子どもがTNさんの家にテレビを見に来たと言う。

NHK放送文化研究所が2002年10月に実施した「テレビ50年調査」の結果では、調査時点で50歳以上の人に家にテレビが来たときの感想を尋ねたところ、79%が「とにかくうれしかった」と回答したという結果であったが（NHK放送文化研究所編，2003），本調査参加者の口からは、そうした購入時の喜びは特に語られなかった。購入の動機を尋ねても、購入が比較的早かったTNさんの場合でも、購入を決めたのは、当時、同じくらいの年齢の社員が暮らしていた社宅で「周りがほちほち買い始めたから」と、どちらかというところ消極的なものであった。他の調査参加者も、「いつまでも子どもがよそのお宅にお世話になっているわけにはいかないから」、あるいは「テレビを見せてもらっているお宅で子どもが暴れて迷惑をかけたから」といった理由で購入を決めたということであった。小学校の教員をしていたKKさん（84歳，男性）の場合は、テレビは子どもによくはないからという理由もあってしばらく購入を見合わせていたと言う。本調査参加者の多くは、自分のためというよりは、テレビを見たがる子どものために、あるいはIKさんのように親に見せてあげたいために、あるいは周りが買い始めたので、といったやや消極的な動機で、

脚注

5. 内閣府消費動向調査（全国月次平成16年4月調査より）結果
(<http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/shouhi.html>)

幾分なりとも無理をしてテレビ受像機を購入していた。当時、30歳前後で幼い子どもを抱えていた調査参加者たちにとって、テレビ受像機は大きな買い物であり、手放して購入を喜べるような心境にはなかつたことがうかがえた。

3.2 中年期のテレビ視聴の記憶

では、自宅でのテレビ視聴が可能となった後、どのような番組をどのように視聴してきたと記憶しているのだろうか。

萩原らの研究チームによる2009年ウェブ・モニター調査では、過去から現在に至るまで放送された数々のテレビ番組の視聴経験の有無を、具体的に50の番組名を挙げて尋ねているが、70歳以上の回答者の記憶の中で28名全員に視聴経験が共有されていた番組は、一つも無かつた。視聴経験の割合は、1960年代から現在まで続く長寿番組でも、『水戸黄門』（1969年～：TBS系列）が53.6%、『笑点』（1966年～：日本テレビ系列）と『サザエさん』（アニメ1969年～：フジテレビ系列）が共に50.0%で、10代から60代ではいずれも65%以上であることを考えると（小城他，2010）、共有率は低かつた。設定した50番組の中で最も多くの人に視聴経験があつたものは『8時だヨ！全員集合』（1969年～1985年：TBS系列）で71.4%であつた。この番組が、40年以上も前から調査時でもなお放送されている長寿番組以上に多くの人に視聴の記憶が共有されていたのは、良くも悪くも話題性が高かつたからだろう⁶⁾。他には、『奥様は魔女』（1966年～1968年：TBS系列，60.7%）や『刑事コロンボ』（1972年～1981年：NHK総合，57.1%）が共有率が高かつた。これらウェブ・モニター調査の結果にジェンダーによる有意差は見られなかつたが、インタビュー調査では違いが見られたので、以下男女別に述べていく。

1) 男性の場合

「とにかく忙しゅうてテレビやら見てられやせんもん（忙しくてテレビなど見ていられなかつた）。どんなテレビ番組を見ていたかを尋ねたときのTNさんの回答である。福岡市で会社勤めをしていたTNさんは、残業続きで、とてもテレビなど見ている暇はなかつたと語つた。休日もゴルフに出かけることが多く、テレビ視聴が可能となるための在宅時間も短かつた。定年少し前に関連会社に出向した後に少しゆとりができて、やっとテレビを見ることができるようになったということであつた。山口県で小学校の教員をしていたKKさんに尋ねても、やはり「忙しくてテレビなど見る間がなかつた」と答えた。学校では宿直もあつたし、家に帰れば農作業もあつた。KKさんの場合、そもそも娯楽としてテレビを視聴しようとする志向性が感じられなかつた。単身赴任のため一人で教員住宅に住んでいたこともあつたが、そのときもテレビは置いていなかつたと言う。娯楽らしい娯楽といえば、教員仲間との麻雀くらいであつた。また、家の都合で他所での会社勤めを途中で辞めて実家に戻り、家業に従事してきたKUさん（82歳）も、「テレビはあんまり見なかつたね」と言う。「ニュースと野球くらい」で、特に思い出に残るような番組もないということであつた。

このように、彼らの現役時代のテレビ視聴の記憶は、「忙しくてテレビは見えていない」と総括されて語られていた。この年齢コーホートの人々の職業生活は、戦後日本の経済成長とともにあり、働くことによって生活が豊かになるのを実感できた。1930年生まれとして設定したモデルは、池田内閣が「所得倍増計画」を発表した1969年に30歳、GNPが自由世界で第2位となつた1968年には38歳である。1956年から第1次オイルシヨッ

脚注

6. ザ・ドリフターズ主演の公開形式のバラエティー番組で、子どもたちに圧倒的な人気を誇り、71年には視聴率が50.4%に達した（伊豫田ら，1998）。一方で、婦人団体などから、「言葉遣い

が悪い」「食べ物をそまつにする」などとして、ワースト番組の批判も浴びた（朝日新聞，1985年7月20日朝刊）。

クを迎える前年の1972年まで、日本経済は年平均9.3%の高度成長を遂げ（経済企画庁編、1997）、人々の生活水準は目に見えて上昇した。TAさん（83歳）によると、この頃は「どんだん給料が上がる時代」で、大阪で勤務していた証券会社からの給料は、「なんぼ金使っても満てんくらい（どれだけ金を使おうとも余るほど）」だったと言う。金額も鮮明に記憶しており、自分の働きによって豊かな生活を手に入れていったことを誇らしく思っていることがうかがえた。その後も日本経済は、2度のオイルショックや日米経済摩擦などによる一時的な後退や停滞を経験しながらも右肩上がりの「安定」成長を続け、1980年代後半には「バブル景気」と呼ばれる爛熟期を迎える。バブルが弾け、地価が下落してカード破産が話題となった1992年にモデルは62歳であるから、まさに現役生活は日本の経済成長とともにあり、経済成長の終了とともに現役生活も終了した。こうした時代に中年期を過ごしてきたから、働けば働くほど豊かになる実感もあり、あまり厭うこともなく長い時間を仕事に費やしてきたことは確かであろう。娯楽もゴルフや麻雀などで家を空けることも多く、おのずとテレビ視聴時間も短かった。NHK 国民生活時間調査の結果によると、男女別年齢層別で見た1975年の日曜日のテレビ視聴時間は、当時40代だったこのコーホート男性は20代男性に次いで短い（NHK 放送文化研究所編、2002）⁷⁾。

しかし、彼らがまったくテレビを視聴していなかったわけではない。TNさんの娘は、父親も含め家族全員でNHK総合の大河ドラマや『日曜洋画劇場』（1966年～：テレビ朝日系列）を視聴した記憶があるし、KKさんの息子は、父親が相撲や野球などを視聴していたことを記憶している。また、IKさんもKEさんもTAさんも、職場にはテレビが置いてあり、大きな出来事のニュースは、そのテレビで見たことを語っていた。では、なぜ、「テレビは見えていなかった」と総括されてしまうのだろうか。一つには、人の自伝的記憶の特徴から説明可能であろう。自伝的記憶の特徴として、最近の出来事は想起されやすいこと（新近性効果）、0歳から3～4歳までの記憶は乏しいこと（幼児期健忘）、さらに10歳から30歳くらいまでの出来事の想起量が多いこと（レミニセンス・バンプ）の3つが指摘されている（楨、2008）。このコーホートの人々にとって、テレビを視聴し始めた頃はすでに中年期にさしかかっており、中年期のテレビ視聴行動の記憶は、自伝的記憶の特徴として想起されにくい時期に該当する。また別の理由として、仕事中心であった彼らの生活を考えると、彼らのテレビ視聴は、リラックスして仕事の疲れをいやすためであったり、単に家族と一緒に時間を過ごすためであったり、わずらわしいことを考えなくて済むためであったり、と、主に明日の仕事の活力のための気晴らしを目的とした、どちらかと言うと受動的で関与の低いものであったことが推測され、従って記憶に残りにくかったのではないかと考えられる。

2) 女性の場合

NHK 国民生活時間調査のこれまでの結果を見ると、女性の方が男性よりもテレビ視聴時間が長い（たとえば諸藤・渡辺、2011）、本調査参加者の多くは、結婚後も家業を初め仕事に就いていた上、子育てと、さらに舅・姑と同居していたために遠慮もあって、やはり男性の調査参加者と同様、あまりテレビは見えていなかったと話した。『ジェスチャー』（1953年～1968年：NHK総合）、『お笑い三人組』（1956年～1966年、NHK総合）、『てなもんや三度笠』（1962年～1968年：朝日放送・TBS系列）、『おはなはん』（1966年～1967年：NHK総合）など、1950年代から60年代にかけての人気番組名を出すと、全員が視聴した経験があることは記憶していたが、ゆっくりと番組を視聴するようなゆとりは

脚注

7. 40代男性は4時間1分で、最も短かった20代男性は3時間59分であった。

なかったと言う。KMさん（80歳）は次のように語った。

『おはなはん』ごろは、私ら、悠長な生活じゃなかった。あのころは、（朝）8時ごろは、仕事に行かないけん（行かないといけないから）。10円でも稼がないかんけん（稼がないといけないから）。働く人間は、朝ドラは見れん（見れない）。

再度視聴を希望する過去のテレビ番組名を尋ねたところ、挙がってきたのは『おしん』（1983年～1984年：NHK総合）や『渡る世間は鬼ばかり』（1990年～2011年：TBS系列）など、比較的新しい番組であった。1930年生まれのモデルの場合、『おしん』の1983年は53歳、『渡る世間は鬼ばかり』が始まった1990年は60歳である。このような年齢になって初めて、自分のためにゆっくりとテレビを視聴するゆとりが生まれたのかもしれない。実際にKFさん（85歳）は、この頃は勤めを辞めており、家でゆっくり番組を視聴できたと語っていた。

本調査参加者の場合は、仕事を持っていたり、姑と同居していたりして、KMさんが言ったように「悠長」にテレビなど見ていられなかったということであったが、すでに述べたように人気番組の視聴経験の記憶はあり、さらに子どもが楽しんで見ていた番組を子どもと一緒に視聴したりもしている。HMさんは、夜7時ごろは子ども中心でテレビを視聴しており、『怪傑ハリマオ』（1960年～1961年：読売テレビ・日本テレビ系列）や『ジェスチャー』などを一緒に見たと言う。NKさん（82歳）は、子どもと一緒に『大草原の小さな家』（1975年～1982年：NHK総合）を見たことを記憶しており、AFさんの娘は、母親と一緒に『チロリン村とクルミの木』（1956年～1964年：NHK総合）や『ひょっこりひょうたん島』（1964年～1969年：NHK総合）を見たと話していた。このコーホートは、下の世代よりも家庭内での性別役割分担を当然と考える人たちが多く（河野，2008）、家事労働一般を担うために男性よりも在宅時間も長く、家事をしながら、あるいは子どもと一緒に、テレビに親しむ機会が男性よりも多かったと推測される。そして、子どもが成長して生活にゆとりが生まれるようになると、男性よりも一足早くテレビ番組を楽しむようになったようだ。

本調査では少数だったが、女性の中には主婦業や家族の介護に専念するために、無職のまま家庭内に留まって中年期を過ごした人もいる。本研究で対象とするコーホートよりも少し年齢は上になるが、1917年（大正6年）生まれのTKさん（93歳）は、一時的に英語を教えたりもしていたが、同居の義母が病気を患って以来60歳まで、介護のために大半の時間を家庭内で過ごした。当時のTKさんにとってテレビは唯一の楽しみだったと言う。また、40歳近くまで親の介護のために家を空けられなかったSNさんにとっても、テレビは欠くことのできないものだった。テレビで社会の出来事を知り、ドラマを楽しみ、生活上の知識を得て、俳優など有名人の動向を知ったということである。

SNさんのように生活上の知識や教養を得るためにもテレビを利用した例として、本調査参加者の中ではHMさんがいる。HMさんは、娯楽も含めて良い番組と思えるもののみを選択的に視聴してきたということで、たとえば『NHK特集シルクロード』（1980年～1984年：NHK総合）を見てタクラマカン砂漠を知ったと言う。こうしたテレビ利用についての話は、少なくとも本調査に参加した男性からは聞かれなかった。

▶ 4 結果(2)：現在のテレビ視聴

4.1 ウェブ・モニター調査結果から

では、「後期高齢者」と分類されるようになった現在は、どのようにテレビを視聴しているのだろうか。萩原らが2009年2月に実施したウェブ・モニター調査では、現在のテレビ視聴時間について、70歳以上の半数が「4時間以上」と回答していた。「ほとんど見

ない」との回答は皆無であり、テレビと親和性の高い生活を送っていることがわかる。これは他の回答結果にも示されており、たとえば、生活の中でのテレビの位置づけを問う質問では、「やや」という程度も含めて「当てはまる」との回答は、「テレビを見るのが大好きだ」については82.1%、「特に何もすることがなくて暇なとき、テレビでも見ようという気になる」が78.6%、「見たい番組があると、時間のやりくりをして見る」と「見たかったテレビ番組が見られないと残念に思う」がともに75.0%、「テレビを見るのは大切な生活の一部になっている」が71.4%であり、7割以上の人々がテレビを親密な生活上のパートナーとして暮らしていることがうかがえる。また、テレビの見方について問う質問では、「番組をじっくり見る」は92.9%、「見る番組をあらかじめ選んで見る」については100%が該当すると回答しており、主体的に選択した番組をじっくり専念視聴するという視聴スタイルがうかがえた。視聴している番組ジャンルとしては、最も多かったのは「ニュース報道」で96.4%、続いて「天気予報」(82.1%)、「ドラマ」(67.9%)、「ドキュメンタリー・社会派番組」(67.9%)、「紀行番組」(64.3%)、「お笑い番組」、「スポーツ番組」、「ワイドショー」、「生活情報・実用番組」(いずれも50.0%)であった。

中年期のテレビ視聴にジェンダー差が見られたように、本調査の結果の中にも、視聴時間以外でジェンダーによる有意差が見られた項目があった。よく見る番組ジャンルで、女性の方が多かったものに「ワイドショー」($p<.05$)、「クイズ・ゲーム」($p<.05$)、「料理・グルメ番組」($p<.01$)、男性の方が多い傾向が見られたものとして「ドキュメンタリー・社会派番組」($p<.1$)があった。女性の方が男性よりも多様なジャンルの番組を視聴していることがうかがえる。一般に女性はドラマを好み、男性はスポーツを好むと言われているが(NHK放送文化研究所編, 2003)、本ウェブ・モニター調査の70歳以上の回答では、ドラマもスポーツ番組も男女ともによく視聴されており、ジェンダーによる有意差は確認されなかった。

4.2 インタビュー調査結果から

1) 男性の場合

続いてインタビュー調査で聞き取ることができたテレビ視聴行動であるが、番組の好みや視聴行動にもやはりジェンダーによる差がうかがえたので、男女別に述べて行く。まず男性についてであるが、男性の口から好んで視聴する番組として挙げたのは、圧倒的に『水戸黄門』が多かった。KEさんは番組開始当初からのファンで、現在は、夕方からの再放送を夫婦で視聴していると言う。樹の杖をついて歩く姿はさながら「黄門さま」で、本人もそれを自認している。KKさんの場合はテレビが好きではなく、あまり視聴することはなかったが、定年退職後は『水戸黄門』を初めとして時代劇を好んで視聴していたという話であった。TAさんも、夕方からの『水戸黄門』をずっと視聴している。TAさんのこの頃の生活は、「夕方4時から(再放送の)『はぐれ刑事純情派』(1988年～2005年：テレビ朝日系列)を見て、5時から『水戸黄門』(再放送)を見ながら5時半ごろから夕食を取り、終わったら風呂に入って寝る。朝は4時に起きて、『みのもんたの朝スバッ!』(2005年～：TBS系列)を見る」とのことである。『水戸黄門』は、高齢者の多いこの地域での人気番組で、各種の会合は夕方の『水戸黄門』が始まる前までに終了しないと成立しないほどだと、町役場に勤務していた男性は話していた。

このように『水戸黄門』好きの高齢男性のグループで、古いシリーズから選んで同番組を共同視聴したことがあったが、視聴後に特段の感慨も聞かれず、また、主演の男優について話題を提示しても、特段の関心を引くことはなかった。話が弾んだのは、この番組の魅力について尋ねたときである。TAさんは次のように語った。

筋は同じやけどね、やっぱりね、人間としてどうあるべきか。今は、今の日本には、水戸黄門みたいな人が必要なんよ。

黄門役を誰が演じようと、それにはあまり頓着しない。毎回同じようなストーリーが、同じような時間進行で展開して行き、番組の終盤でクライマックスを迎えると、お供の者が「この紋所が目に入らぬか」と葵の御紋の入った印籠を提示して、「悪人ども」は「黄門さま」の前にひざまずいて首を垂れる。このように、「悪」は必ず高齢の「黄門さま」によって成敗されるというお決まりの展開に、「やっぱり世の中はこうでなくてはならん」と溜飲を下げるのである。香取（2008）も、弱きを助け、悪を懲らしめる勧善懲悪の思想と、それに基づいたお決まりの決着によってもたらされる高いカタルシス効果が、高齢者にとってのこの番組の魅力であると述べている。

視聴している番組として、『水戸黄門』以外にも時代劇の番組名はいくつか挙がった。時代劇を好む男性が多いことは、他の調査結果に基づいて香取（2008）も述べている。その他では、たとえばTNさんが今、楽しみに見ているという『相棒』（1998年～：テレビ朝日系列）がある。この番組は、藤田（2011）によれば、現代ドラマながら、登場人物が固定していて事件の解決パターンが決まっているため、定型のものを予測しながら安心して見ることができる点が時代劇と共通していると言う。TNさんは『水戸黄門』は視聴していないものの、これまで多くの時代劇を好んで視聴しており、時代劇と同様の魅力を感じているのかもしれない。また、テレビはあまり視聴してこなかったというKKさんは、韓国製ドラマである『宮廷女官チャングムの誓い』（2005年～2006年：NHK総合）を楽しみに視聴していたと言う。KKさんは韓国製のドラマが好きなのではなく、あくまでもこの番組が面白かったからということであるが、『水戸黄門』のように1話完結でもなく、日本製のドラマと比べて格段に長期にわたる連続ドラマであっても、この番組が、これまでのテレビ番組視聴経験がそれほど豊かでもなかったKKさんにとっても魅力的だったのは、このドラマが恋愛ドラマではなく韓国の李氏朝鮮時代の時代劇であり、親の無念の想いを晴らすために主人公が宮廷内で昇進していくという、どこかなじみのあるストーリー構成だったからかもしれない。このドラマは、NHK放送文化研究所による2006年の「番組総合調査」で、最も満足率の高かった番組であった（照井，2009）。

脚を悪くして出歩くことができなくなったTNさんにとって、今の楽しみといえば食事とテレビ視聴である。『相棒』や時代劇以外にも、野球やゴルフ、マラソン、相撲などのスポーツ中継を楽しみに見ている。毎朝、新聞のテレビ欄をBSも含めて入念にチェックし、マーカーで印をつけて、その時刻になったらチャンネルを合わせて視聴しているとのことである。他の調査参加者の多くも、録画によるタイムシフト視聴はせず、好みのテレビ番組の放送時間に合わせて生活時間を組み立てていることがうかがえた。

2) 女性の場合

これに対して女性が現在視聴している番組は、ウェブ・モニター調査の結果と同様、男性よりも多様であった。彼女たちの口からは、よく見ている番組として、香取（2008）が高齢者に好まれる番組として挙げた『ためしてガッテン』（1995年～：NHK総合）や『NHK歌謡コンサート』（1993年～：NHK総合）、『鶴瓶の家族に乾杯』（1995年～：NHK総合）などの他、『開運！なんでも鑑定団』（1994年～：テレビ東京系列）や『行列のできる法律相談所』（2002年～：日本テレビ系列）、またNHK朝の連続テレビ小説（調査実施時は『ゲゲゲの女房』）や大河ドラマ（同じく『龍馬伝』）、クイズ番組など、はるかに多様な番組名が挙がった。NHK放送文化研究所による2010年の「番組総合調査」によると、『NHK歌謡コンサート』や『鶴瓶の家族に乾杯』は「くつろげる・リラックスできる」という理由で視聴されているが、『ためしてガッテン』は「知識・情報が得られる」という理由で視聴されていることが示されており（中野，2011）、彼女たちがテレビ番組からくつろぎ

だけでなく、積極的に生活知識を得ようとしている態度もうかがえた。ただ、最近は、「自分たちだけでワーワー話しよる（話している）」番組ばかりで、「私らの見る番組がのうなった（無くなった）」と残念に感じているとのことである。

男性との違いは視聴する番組の多様性だけではなく、ドラマの楽しみ方にも現れていた。同じ地域の多くの男性が『水戸黄門』を好んでいることを伝え、やはりこの番組を視聴しているのかと尋ねたところ、口々に「『水戸黄門』はワンパターンで面白くないので見ていない」との答えが返ってきた。彼女たちが再視聴を希望した番組の中に、2011年まで続いた『渡る世間は鬼ばかり』があり、1990年に放送されたこのドラマの第1回放送分を共同視聴したが、その後の話し合いでは活発に意見や感想が飛び交った。「ああいふ風に（嫁に）言ってみたい」（MAさん、78歳）、「でも、言うたらおしまいですからね、言うたらおしまい」（KHさん、86歳）、「若い時には姑に気兼ねし、今は嫁に気兼ねして、わたしたちの世代は両方にはさまれて最中の餡子」（KFさん、85歳）、「若い時は親のために親を養わないけんし、今は子どものためにやって、一番損な世代」（KMさん、80歳）など、参加者たちは口ぐちに、ドラマの内容を身近な現実生活に引きつけて、各自が積極的に意見や感想を述べ合っていた。

香取（2008）は、『渡る世間は鬼ばかり』が『水戸黄門』と同様に高齢者に人気のあるのは、どちらもパターン化されたストーリーであり、高齢者にそれなりの役割が与えられていて、ストーリーの最後には高齢者の気持ちがスカッとする解決が提示されることなどの特徴があり、わかりやすく感情移入しやすく、日常のストレスを発散しやすいためと述べている（香取2008：148）。確かにそうした共通点はあったとしても、現実世界から遠く離れた世界での勧善懲悪の物語に主にカタルシスを得るために好んで視聴している男性たちとは違い、女性たちは、多少デフォルメされながらも自分たちの生活世界に近い『渡る世間は鬼ばかり』のストーリー展開から、身近な現実での教訓を確認したり、自分たちの半生を振り返る機会とするなど、もっと多様な見方をしていた。

女性たちの積極的な生活態度はテレビ視聴以外の活動においても感じられ、最近の楽しみとして、健康維持のための体操をしながらみんなとおしゃべりをすることや、ひ孫と遊ぶこと、あるいは服のリフォームをすることや、バザーに出品するために作品を作ること、また大正琴やコーラスなど、さまざまな活動が挙げられた。齋藤（2008a）は、高齢者の生活観から「人生満足因子」「生活沈滞因子」「外向性因子」「人間関係良好因子」「高齢肯定因子」の5つの因子を抽出し、積極的な交友関係、他者との関係を求める「外向性因子」は、60歳から70歳に上がる中で男女の開きが極端に大きくなり、女性は有意に高いことを述べているが（齋藤2008a：11）、本調査結果でもこの傾向が確認された。齋藤（2008a）は、こうした外向性因子の得点が高い人は、高齢になってテレビ視聴量が増大することはないが、普段のテレビ視聴を交友のきっかけや機会に利用していることを報告している。

▶ 5 まとめと考察

井田（2004）は、2002年に実施した「思い出の番組アンケート」に、70歳以上の女性が「テレビに出会ったところがちょうど所帯を持ったところで、次々とする電化製品を買うことが生活の目的だったように思う」とのエピソードを寄せたことを紹介しているが、これは、本研究が焦点を当てた1930年（昭和5年）生まれを中心に前後5歳ほどの年齢コーホートに該当する人々の当時の生活ぶりを代表していると言えよう。このコーホートは成人した後にテレビと出会い、ライフステージにおける中年期にさしかかった頃の結婚・子育て期に白黒テレビ普及期を迎えた。彼らにとってテレビは「やって来る」（吉見、2003）ものではなく、子どものため、親のため、またはこぞって生活の豊かさを目指した当時の

社会の同調を求める圧力によって、月賦を利用するなど多少の無理をしながらも「購入する」ものであった。彼らの年齢から考えて可処分所得が多いはずもなく、このイノベーションを早期に採用するのは難しかったであろう。実際に本調査参加者は、地方在住であったということも加わって、多くは「後期多数採用者」、早い人でも「前期多数採用者」(Rogers, 1983=1990)に分類される。このような人々にとってテレビ受像機の購入は、「とにかくうれしかった」(NHK放送文化研究所編, 2003)と手放しで喜べるものではなく、喜びがあったとしても、せいぜい人並みの生活に追いつき社会的圧力から解放されたことによる秘かな安堵であろう。本調査で購入が遅かった人たちは、購入の記憶もおぼろげだった。

その後のテレビ視聴行動はジェンダー差が大きい。「奇跡」とも言われた戦後日本の高度経済成長期に働き盛りを過ごし、その後、第1次オイルショックを初め多少の後退期や停滞期を経験しながらも、1980年代後半の「バブル景気」と称される日本経済が爛熟期を迎えた頃から1990年代初頭の「バブル崩壊」を迎える前に現役を引退したこのコーホートの男性は、まさに右肩上がりの日本の経済成長とともに職業人生を歩んできた。であるから、家庭に豊かな生活をもたらす自分自身、自分のはたらきや自分の職業、就業している会社を誇らしく思っていたことであろう。本調査参加者の「忙しくてテレビを見る暇がなかった」という言葉には、その矜持が垣間見える。戦時中の教育を受け、勤労・勤勉のエトスを身に着けた彼らが、生活の豊かさをもたらしてくれる労働に多くの時間を捧げ、休日も仕事仲間とのゴルフや麻雀で家を空けるなどで在宅時間は短く、ゆっくりとテレビを見る時間が少なかったことは事実であろう。しかし、その子どもたちの証言にもあったように、彼らが全くテレビを見ていなかったというわけではない。多少なりとも視聴していながらも本調査参加者の口からは「テレビは見ていなかった」と総括されて語られたのは、人間の自伝的記憶の特性として中年期の出来事は想起されにくいことや、彼らのテレビ視聴が、多くは仕事の活力を養うための気晴らしにすぎず、受動的で関与の低いものであったことが考えられる。

一方、女性たちは、男性たちと比べるとテレビとの接触の仕方はもっと多様であった。この年齢コーホートは、性役割や家族についての意識が下の世代よりも保守的であることが示されており(河野, 2008)、都市部では無職のまま家事に従事する主婦の専門化が進んだ(国広, 2012)。本調査では、敢えて都市部ではなく地方に調査参加者を求めたため、都会で専業主婦として中年期を過ごしたこの年齢コーホートの女性の直接的な語りはデータとしてないが、家族の介護のために家事に専念していた本調査参加者たちはテレビに大きく依存し、さまざまなニーズを満足させていた。家を出ることもままならない彼女たちにとって、テレビは社会への窓であり、娯楽を提供してくれる劇場であり、生活上のさまざまな知識を与えてくれるアドバイザーであり、有名人の動向を知らせてくれる情報通の友人であった。本調査参加者の多くのように地方で就業していた女性の場合でも、子育てが一段落するまでは男性と同じくテレビを視聴している暇などなかったと言う傾向にあったが、忙しさの中にも家事をしながら人気番組や子どもが視聴していた番組を見てテレビには親しんでおり、子育てが終了してゆとりができると、男性よりも一足早くテレビをゆっくり視聴し始めた。

そして現在、男性も女性もテレビに依存した生活を送っている。NHKが2010年に実施した「国民生活時間調査」によると、70歳以上の平日のテレビ視聴時間は、男性が5時間39分、女性は5時間29分で、他の年代に比べて視聴時間が非常に長い⁸⁾(諸藤・渡辺, 2011)。しかし、どのようなテレビ番組をどのように視聴しているのかについてはジェン

8. 次に視聴時間の長かった60代と比べても、男性は70分、女性は50分長い。

ダー差があった。現在、男性が好んで視聴している番組は、『水戸黄門』に代表される定型化された時代劇のようなドラマであり、予測通りに展開するドラマに安心感を得て、主人公に自己を投影してカタルシスを得ている。他にはニュースやドキュメンタリー、スポーツ中継なども視聴しているが、女性ほど多様ではない。こうした番組を楽しんで視聴するためにオーディエンスに必要とされるリテラシーは、テレビ放送草創期と基本的には変わらない。

一方、女性は男性よりも多様なジャンルの番組を楽しみ、ドラマ視聴にしても、身近な自己の状況に当てはめて教訓を得ようとしたり、自己の人生を振り返る機会にしたり、と現実の生活に積極的に活かすための見方をしている。また、テレビから生活上の知識や教養を得るため、つまり佐藤（2008）の言う「テレビ的教養」を身に付けるための視聴をしていた参加者もいる。これは男性の本調査参加者からは聞かれなかった利用の仕方である。

こうしたジェンダー差は中年期に生じ、それがそのまま引き継がれたと言ってよい。女性の場合は、たとえ自分の好みの番組の専念視聴は難しかったとしても、家事をしながら、または子どもと一緒に視聴しながらテレビに親しみ、そうした中でテレビの効用を引き出すための多様な見方を身につけ、男性よりも早い時期にテレビを楽しむようになっていったのではないかと思われる。男性は中年期の視聴時間も短く、受動的で関与の低い視聴を続けてきた結果、テレビ視聴から多様な楽しみを引き出すための十分なりテラシーを身につけられないままに老年期を迎えた。その結果、女性よりも楽しみをテレビに依存する傾向が強いものの、女性ほどには多様な効用をテレビ視聴から得ないまま今日に至っている。

なお、テレビに対する批判は、大宅壮一の「一億総白痴化」に代表されるように草創期からかまびすしく、このコーホートは幼い子どもを持つ親として、こうした批判を深刻に受け止めながら、テレビに対する態度形成を迫られたことがあったはずである。それが自身のテレビ視聴行動にも反映されたと思われるが、本調査ではその検討は十分にできなかった。次なる課題としたい。また、敢えて地方に調査参加者を求めたがゆえに都市部の視聴者の直接的な声がデータとして欠けていた点も、次回へ向けての課題である。引き続き検討を行いたい。

●引用・参考文献

- 朝日新聞 1985年7月20日朝刊 サ・ドリフターズの「8時だヨ！全員集合」打ち切りへ。
- 藤田真文（2003）テレビ時代劇研究序説—ジャンル形成とテキスト構造— 思想, 956, 98-113.
- 藤田真文（2011）例えば「相棒」, 代役はある（耕論）助さん、格さん、参りましょうか 朝日新聞 2011年8月13日朝刊。
- 萩原滋・小城英子・村山陽・大坪寛子・渋谷明子・志岐裕子（2010）テレビ視聴の現況と記憶—ウェブ・モニター調査（2009年2月）の報告(1) メディア・コミュニケーション（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要）, 60, 5-28.
- 橋元良明（2011）メディアと日本人—変わりゆく日常 岩波書店。
- 平田明裕・諸藤絵美・荒牧央（2010）テレビ視聴とメディア利用の現在(2)～「日本人とテレビ・2010」調査から～ 放送研究と調査, 2010年10月号, 2-27.
- 井田由美子（2004）テレビと家族の50年—“テレビ的”一家団らんの変遷 NHK放送文化研究所年報 2004, 111-144.
- 伊豫田康弘・上滝徹也・田村穰生・野田慶人・八木信忠・煤孫勇夫（1998）テレビ史ハンドブック改訂増補版 自由国民社。
- 香取淳子（2000）老いとメディア 北樹出版。
- 香取淳子（2008）高齢者のメディア生活における光と影 NHK放送文化研究所編 現代社会とメディア・家族・世代 新曜社, 129-155.
- 経済企画庁編（1997）戦後日本経済の軌跡—経済企画庁50年史 大蔵省印刷局。
- 河野啓（2008）現代日本の世代 NHK放送文化研究所編 現代社会とメディア・家族・世代 新曜社, 14-38.
- 小城英子・萩原滋・村山陽・大坪寛子・渋谷明子・志岐裕子（2010）集合的記憶とテレビ—ウェブ・モニター調査（2009年2月）の報告(2) メディア・コミュニケーション（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要）,

60, 29-47.

- 国広陽子 (2009) テレビ・オーディエンスとしての男性 国際ジェンダー学会誌, 7, 27-51.
- 国広陽子 (2012) テレビ娯楽の変遷と女性—テレビ・ドラマを中心に 国広陽子・東京女子大学女性学研究所編
メディアとジェンダー 勁草書房, 65-108.
- 国広陽子・大坪寛子 (2009) テレビとは何だったか：記憶される娯楽としてのテレビ 武蔵大学武蔵メディアと
社会研究会 2008 年度研究プロジェクト成果報告書, 1-22.
- 国広陽子・大坪寛子 (2010) 過去のテレビ番組と記憶の共有：超高齢社会におけるテレビ番組利用の可能性 放
送文化基金『研究報告』平成 20 年度助成・援助分 (人文社会・文化)
(<http://www.hbf.or.jp/grants/pdf/j%20i/20-ji-kunihiro.pdf>).
- 槇洋一 (2008) ライフスパンを通じた自伝的記憶の分布 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美編 自伝的記憶の心理
学 北大路書房, 76-89.
- 牧田徹雄・上村修一 (1985) 日本人とテレビ 放送研究と調査, 1985 年 8 月号, 2-17.
- 諸藤絵美・渡辺洋子 (2011) 生活時間調査からみたメディア利用の現状と変化～2010 年国民生活時間調査より～
放送研究と調査, 2011 年 6 月号, 48-57.
- 中野佐知子 (2011) テレビ番組に対する意識・評価の現況～2010 年 6 月「番組総合調査」の結果から～ 放送研
究と調査, 2011 年 2 月号, 56-67.
- 日本放送協会編 (1977) 放送五十年史 日本放送出版協会.
- NHK 放送文化研究所編 (2002) 日本人の生活時間・2000 - NHK 国民生活時間調査 - 日本放送出版協会.
- NHK 放送文化研究所編 (2003) テレビ視聴の 50 年 NHK 出版.
- 大島町役場 (1994) 周防大島町誌 復刻版.
- 大坪寛子・国広陽子・有馬明恵 (2011) 高齢者の QOL を豊かにする過去のテレビ番組利用の可能性：回想法への
応用の試み 放送文化基金『研究報告』平成 21 年度助成・援助分 (人文社会・文化)
(<http://www.hbf.or.jp/grants/pdf/j%20i/21-ji-otsubo.pdf>).
- 大坪寛子・国広陽子 (2011) 過去のテレビ番組を回想法に利用する試み：高齢者の QOL を豊かにするために 日
本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 246.
- Rogers, E. M. (1983) *Diffusion of Innovations* Third Edition, The Free Press. (= 青池慎一・宇野善康監訳 1990
イノベーション普及学 産能大学出版部).
- 齋藤建作 (2008a) 高齢者のテレビ視聴 (上) 放送研究と調査, 2008 年 9 月号, 2-17.
- 齋藤建作 (2008b) 高齢者のテレビ視聴 (下) 放送研究と調査, 2008 年 10 月号, 66-79.
- 桜井哲夫 (1994) TV 魔法のメディア 筑摩書房.
- 佐藤卓己 (2008) テレビ的教養 一億総博知化への系譜 NTT 出版.
- 田口恵一 (2004) 70 歳代・80 歳代の高齢者はどのようにドラマを見ているか? 放送研究と調査, 2004 年 10 月号,
66-75.
- 照井大輔 (2009) テレビ番組に対する意識・評価の現況～2008 年 6 月「番組総合調査」の結果から～ 放送研究
と調査, 2009 年 2 月号, 36-46.
- 吉見俊哉 (2003) テレビが家にやって来た—テレビの空間 テレビの時間— 思想, 956, 26-48.

大坪寛子 (慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所研究員)

国広陽子 (東京女子大学現代教養学部教授)